

# 日本大学山岳部八十年の歩み

2004年 創部八十周年記念号 2004年11月20日発行 日本大学保険体育会山岳部・桜門山岳会

## はじめに

最初に、日本大学山岳部の創部から八十年の大きな流れをまとめてみた。

## 山岳部創部から終戦まで

山岳部の創部は、1924年、法学部学生豊島擴により行なわれたが、当時の山岳部は、ハイキング部の域を出ていなかった。

昭和初期の活動は、1927年に初見が山岳部に入部し、法政大宇山岳部の角田氏らに指導を受けてからは、初見は自らも部員の養成を行ない活動を広げていった。

1928年暮から針ノ木谷の大沢小屋で、山岳部としてのスキー合宿が行なわれたが、これが初めての山岳部らしい合宿であり、本格的山岳部のスタートでもあった。

初見時代は主として積雪期の穂高連峰が活躍の舞台であり、1931年12月には槍ヶ岳～穂高縦走など特筆すべき活動を行なっている。当時は、初見が関東学生登山連盟で活躍していた関係で、「岳聯報告」1～3号などに記録を發表しており日大としての刊行物はなかったが、1932年12月になって「部報」第1号が發刊されている。

その後、富山の廣田、土肥、米沢らによる積雪期の立山、劔岳のスキーや登山が活発に行なわれた。中でも、1934年4月の廣田、渡邊による、前人未踏の「池ノ谷」の核心部を通過して、劔岳を往復した記録が特筆される。

当時は、専門部工科の「氷稜」や、予科理科の「霧氷」など、それぞれの学部で部内報を出していた。1936年11月には本部の部内報が「岳人」1号と名称を変えて發刊されている。

第二次大戦が始まる頃までの活動には、廣田の後を継いだ渡邊や神山及び大阪の佐藤らによる、戦前の山岳部の黄金時代とも言うべき諸活動があり、当時の特筆すべきものとしては、1940年3月の佐藤らによる天狗のコル～槍ヶ岳往復の極地法登山、4～5月の佐藤らによる未登の不帰二峰東面バットレス登攀などがある。今日まで続く日大山岳部の形が形成されたのもこの時代である。

太平洋戦争が始まってからも食料難、資材不足の中で苦勞して山登りは続けられた。戦局が激しくなった1943年11月に神山宅に関係者が集まり山岳部は体部することになった。

## 戦後の再建、充実と試練の時代

戦後1946年春、神山宅に関係者が再度集まり山岳部の再建を熱心に話し合った。再開後初めての一九四六年初夏の谷川岳合宿、夏の劔岳合宿では、復員した多数のOBが参加し、戦後山岳部の基盤を確立することができたが、1949年春山遠見尾根での敗退など多難な再建時代であった。

1950年代には、石坂、北村、松田らによる厳冬期北鎌から北穂、また翌年には、厳冬期 奥又 白から槍往復や前穂東壁に成功するなど高所露営、極地法を完成に近づけるべく充実した時代もあった。

しかし、1954年の富士山雪崩遭難事故で、1957年には劔岳源次郎尾根で、1958年には冬の穂高涸沢での雪崩遭難事故と七年間に十一名もの部員を失ったことは、まさに、トンネルを抜けられない挫折の時代でもあった。

## 海外での諸活動

戦後の海外での諸活動の原点は、日大OBによる日本山岳会の「山日記」の編集で見た実績と、富士山遭難の捜索を通じての東大山の会との交流にあったとも言われている。山日記の編集がマナスルへと繋がり、その後のヒマラヤ登山の流れになった。また、1954年11月の富士山の遭難で、合同捜索本部のあった富士吉田浅間坊での初見と東大山の会の鳥居民らと知り合ったことが南極へと繋がり、その後のグリーンランド及び北極への流れを作った。そして1995年のエベレスト北東 稜初完登は、この二つの流れを結集した結果であった。

即ち、1965年頃からのヒマラヤ登山禁止令の結果、新天地を求めてグリーンランド遠征(宮原ら)へ出かけたことで、多くの極地の経験者を育て、それが北極点(池田他)の活動にも繋がっていった。

ヒマラヤ登山の方は、日本山岳会のマナスル二次～三次)やヒマルチュリ登山隊(1958～59年)に参加することにより、ヒマラヤの経験をつみ、それが以後のエベレスト(1970年)、チョモランマ(1980年)、カンチェンジュンガ(1984年)、三国友好登山(1988年)への参加協力へとつながり、一方、桜門山岳会のムクト・ヒマール(1962年)、シタ・ツツラ(1970年)、ヤルン・カン(1974年)、ヒマルチュリ(1981年・1986年)とつづき、他に日大OBを中心とする八千丸峰にも、チョーオユー(1991年)、マカルー(1992年)、ダウラギリ(1994年)、ガッシャブルム 峰(1998年)など、1995年のエベレスト北東稜の完登までの一連の成果を上げている。

## その後現在までの現役の動き

1960年代に入ってトンネルを抜けた部は、従来の合宿にとらわれず北海道の山々や冬の越後の山(嵯峨野他)へと活動の場を広げ、一九七〇年代には、積雪期の宇奈月から西穂(半谷他)や積雪の日高全山縦走(木津他)など多彩な活動を展開した。

1980年代には、積雪期宇奈月から劔と黒部横断(中田、向笠他)、厳冬期北鎌から西穂(大谷他)などの活動をしたが、後半には、山登りが多様化するなか、部員の減少により廃部寸前にまで追い込まれたが、桜門山岳会、コーチ会による地道な支援活動が功を奏し部員数も復活してきた。

1990年代には、積雪期の黒部横断と豪雪の越後(山本他)、積雪期の利尻北稜(斎藤他)など、多方面に活動を展開した。その後、空木岳の遭難のため、部の立て直しに苦悩しつつも、厳冬期北鎌尾根から槍経由横尾尾根の縦走(本多他)を行なうなど、従来の合宿にとられない形の山登りを行なった。

2000年代に入り、学生によるメラ・ピーク合宿(深沢他)などを経て、2004年創部八十周年の節目に、次の時代を担う若手OBと学生によるクーラ・カンリにチャレンジする。これらが、若い人達にとって、貴重な体験の場となり、更に引き継がれていくことが期待されている。

以上が通史の概要であるが、後述の通史の内容を見ると、部活動も「山」あり「谷」ありの繰り返しである。しかし毎年の積み重ねが 八十年でもあるので、本章では、紙面のゆるす限り、時系列的に詳述することにした。

## (一)創部から終戦まで(1924～1945)

### 1924(大正13)～1926(昭和元年) 草創期の頃

日本大学山岳部は、日本大学保健体育審議会の略史にあるように、1924年に創部された。日本大学の創立は、その前身である日本法律学校が一八八九年、設立者は吉田松陰の主宰する松下村塾出身の山田顕義である。学内にスポーツ関係の部門が誕生したのは、文武両道の見地から創立後十六年目の1905年であり、日本大学運動会(現保健体育審議会規則が定められたことに始まる。その略史にも端艇部、柔道部、剣道部、相撲部に次いで1924年に馬術部と山岳部が誕生したと記されている。

山岳部の創部者は当時、法学部学生の豊島擴であった。豊島は「大学山岳部」として山に行く以上、大学当局の正式承認を得なければ、大学に対しても済まないと考えた。未公認の間、「日大山岳部旗」を立て、揃いのストッキングで、山に行ってはどうかと提案する部員もいたが、そのようなお祭り騒ぎの好きな部員は、結局部員章をつけてただけで一度も山には登らなかった。正攻法で大学当局の承認をもらおうとする仲間と共に、「学生集会」という名の各運動部の統制機関に向かって懇願したがなかなかちが明かなかった。仕方なく山岡学長に、個人的な了解だけでも得ようと頼みにいったところ、それが功を奏したのか、翌年七月に入って、夏休みとなる頃、豊島は、突然学校当局から呼び出しを受け、山野寿三(当時の総務担当)氏のところへ出頭してみたところ、天幕その他必需品だけは、購入してもらうことができた。大学当局が特別会計で装備を購入してくれたことは、即ち、大学が山岳部を承認したこととなった。

その時の嬉しさと部の状況を豊島は「部員は帰省してしまい、その品物を分配使用することが出来ず、やむなく、天幕や飯盒等を持って、僕は一人朗らかな気持ちで信州の山に入った。一九二五年の事である」と述べている。

また、承認後の部について「大学当局の認識に問題がある一方、我々の山に対する認識、自覚の程度も幼稚なものであった。一部の者以外には、冬山登山ということ、ほとんど考えておらず、ある者は散歩の延長くらいにしか考えていなかった。だから公認問題を解決する意味においても、山岳部の行動は、出来るかぎり盛沢山にしておかねばならぬと考え、冬期にはスキー、スケートの方まで手をのばして活躍する、というような趣意書を作成した。そのうちに、我々の運動の結果というよりも、時勢に対して学校当局が、ようやく眼を向けてきたのか、ともかく予算会議にも召集されるようになり、公認問題は解消した。

こうして我々は、本格的に部の運営についても考えるようになったが、今度は、山と自然を対象とした登行という行為を目的とした"山登り"と、人と人との競技を目的とする"スキー部"、"スケート部"というものとは、本質的には別個のものであらねばならぬと気がつき、第二期の運動としてスキー部を独立させることになり、部員総会の承認を得て、大学当局と話し合いの結果、極めてスムーズに三沢龍雄君を首脳とするスキー部が、山岳部を母体として分離独立することになった。しかし、スケート部は本格的にスケートをする人がいなかったため、分離は流産に終わった」と記されている。

### 1927(昭和2)～1933(昭和8)年 初見一雄の活躍と支えた人達

1927(昭和2)年4月、進歩的、先鋭分子として、暁星中学出身の初見一雄が入部してくるにおよび、山岳部はハイキング部から、本格的な山岳部へと発展して行くのである。

初見一雄は暁星中学時代から大学山岳部への入部を希望しており、日大に入るとすぐに山岳部を捜したが、山岳部はすぐには見つからぬ様な状態で失望した。そこで初見は暁星中学が当時の中央線の始発駅「飯田町」のすぐ近くにあった関係で、「土曜の夜に飯田町へ行けば、山に出かける誰かに会えるだろう」と思いつき、熱心に飯田町駅へ出かけた。そしてここで法政大学山岳部の角田吉夫氏と知り合うのである。角田氏は、当時、法政大学山岳部のリーダーであったが、初見の熱意にほだされて、関温泉での法政のスキー合宿への参加を認めてくれた。角田氏は後に日本山岳会の理事をつとめ「山日記」や「会報」の編集を担当された方で、このような先輩に出会えたことは、新人初見にとって幸運であった。このスキー合宿で、スキーや岩登りの上手な高橋栄一郎氏の指導も受けることができたことも幸いした。こうして日大山岳部でリーダーに恵まれなかった初見も、めきめきと腕を磨き、日大山岳部のリーダーとしての力をつけていった。このように当時、法政大学山岳部は、日大山岳部からみると兄貴方でもあった。

一方、初見は部員の養成にも努力し、1928年12月には針ノ木谷の大沢小屋でスキー合宿を行なっている。参加者は豊島、初見、石井蔵之助、毛馬内次男、葛原合二の五名である。

この前年の1927年12月には、早大山岳部が大沢小屋スキー合宿中に、籠川谷で雪崩に遇い四名が帰らぬ人となった年の丁度一年後であった。

日大山岳部の創部者である豊島擴も、山岳部が大学当局から承認された時を、最初のスタートとすれば、この大沢小屋生活が、二度目のスタートで、いわば山岳部としての本格的なスタートであったことを認めている。即ち、豊島は「1928年12月から翌年1月へかけての大沢小屋生活は、登高と云う点においてこそ、針ノ木岳、蓮華岳への放射状登高を目的としただけで、画期的な仕事というわけにはゆかぬにしろ、我々の山岳部としては、初めての大きな計画であった。それだけに参加した部員は、いずれも優秀な人達であった。僕等は夏山が終わると直ちに、この準備作業に没頭し、幾度か研究会を開いたし、新雪の来る前も、来てからも、準備のために何回も現地へ向かった。この計画内容は総て初見一雄君の腹案であった。極めて合理的に出来ているものと僕は考えた。そしてここまで山岳部が飛躍したことがどんなに嬉しかったか、非常な喜びで初見君の説明を聞いたものである」と述べている。

そうこうしているうちに、関東学生登山連盟が設立される運びとなり、1929年11月21日に早大大隈講堂での設立大会が開かれた。委員校には早大、商大、明大、法大、日大、立大、東京医専が選ばれ、初見はこの大会で議長を務めるなど、設立の中心的役割を果たしていた。

この連盟が設立して一ヶ月後の12月26日に、初見は総勢十二名の部員と共に、再び針ノ木谷に向かった。即ち1930年1月6日付東京朝日新聞(部の記録にはない)の記事から要約すると、「日本大学山岳部初見以下十二名は、針ノ木谷に向かっていた。目的は早大の雪崩遭難についての雪崩状況を研究しようというものである。1月2日午前10時頃、早大生が遭難した場所と全く同じ場所で、スキーで滑走中十二名全員が雪崩により頭まで完全に生き埋めになったのである。七時間雪中で苦闘した結果、凍傷を負ったのみで、全員、奇蹟的に午後四時には救出できた。助かった理由は全員が離散せず近くにいたことで、離れていたら早大以上の遭難者がでたであろう」と記されている。

1920年代後半から30年代前半にかけては、穂高や劔岳の積雪期登攀の時代であるが、初見は部員の養成を忘れず、秋、冬、春と毎シーズン穂高の積雪期登山を行なっていた。

当時は、主峰は登られても、難しいルートは残されているといった時代で、1931年の暮れから翌年の正月にかけては、槍～穂高の初縦走を誰がするかということが注目されていた。

先ず12月22日に、立教隊の堀田弘一、澤木辰雄の二名が、ガイドの今田由勝をともなって、槍～奥穂高までの初縦走に成功。

次いで学習院の加藤泰安氏が、ガイドの中島政太郎と二人で12月31日に槍～奥穂小屋に達し、更に一月六日に穂高小屋～奥穂～西穂までの完全縦走を達成した。初見一雄率いる日大隊も、学習院に遅れること1日、1月1日には肩の小屋に入ったが、風雪で肩の小屋で5日間の停滞を余儀なくされた。一月六日になってようやく好天が訪れたので、初見と西山毅の両名はガイドレスで槍を出発して穂高小屋に向かった。先の二隊が本谷カールを經由して北穂に達したのに対し、彼等は大キレットを忠実に通過して北穂に達したが、穂高小屋の手前、涸沢岳のコルで日没となったので、やむなくこのコルより徳沢に下った。

その後、1月9日に初見、毛馬内、武藤正弘の三名は、再び穂高小屋に入り、14日に奥穂を越えて前穂との最低鞍部まで。18日再び前穂に向かったが、天候悪化のため引き返した。しかし、その頃の日大山岳部の力は、他校に引けをとらぬところまで育っていた。

初見が参加できなかった1931年春山の白馬山行で、4月29日に現役部員の木代不二夫を、白馬大雪渓で、疲労凍死で亡くすという痛ましい遭難事故を起こした。この遭難は山岳部にとって最初の遭難事故となった。

以上草創期の山岳部につき、リーダーとして活躍した初見一雄にスポットを当てて説明してきたが、表面には現れなかったが、初見リーダーを支えてきた部員の中には、多くの部員がいたが、ここでは平沢一久、戸村貞男、三浦義明の三名について触れておきたい。

平沢は戦後長期間にわたり、桜間山岳会の会長を引き受け、戸村は、戦後事業の面でも常に初見を支え、初見亡きあと、長期にわたり桜門山岳会の会長として、持ち前の円満な人柄で、1995年に創部七十周年記念として実施した、エベレスト北東稜の初完登を支えた功労者であった。三浦も忘れることのできない先輩であり、1927年に予科理科の一期生として山岳部に入り、卒業後は本業である製紙工場の排水処理技術面で活躍した。執心なクリスチャンで、エスペラント語を通じての国際交流の面でも知られ、またネパールを愛し留学生から日本のお父さんとしても慕われた。桜門山岳会での貴重な存在であり、陰で初見を支えた功績は大きかった。

## 1932(昭和7)年 部報一号の発行

しかし、この時代には初見が一人ですべてをこなしていたため、部報の刊行にまで手がまわらず、やむなく冬の穂高の記録などは関東学生登山連盟報告書「岳聯報告」に記録を残すようにしていたように見うけられる。

創部から八年経った1932年12月には、待望の日本大学山岳部「部報」1号が編集委員米沢直治、窪田宗英、皆川四郎、坂本貢、金子次郎、古河正文、発行広田賢治によって刊行された。この巻頭の「発刊の辞」にも「1924年、我が日本大学山岳部は創立され、云々」とある(詳細は78頁参照)。

その中に収録されている山行記録は1930年10月から1932年9月まで二年間の記録しかないもので、それ以前の記録は、前述の「岳聯報告」によらなければならない。

## 1929(昭和4)～1935(昭和10)年 富山衆の頑張り

初見の在学中に、富山出身のいわゆる"富山衆"の広田賢治(後に憲治と改名)、米沢直治、土肥信義等はスキーで、立山周辺を登っていたが、積雪期の穂高でも直接初見の指導を受け、初見が北大農学部で学士入学した後の、

日大山岳部の後継者として育っていった。

中でも広田賢治は対外的に知られた初見に対して地味ではあったが後輩の面倒をよく見て神山勉はじめ多くの後輩の信望を集めていた。

広田は富山県の新潟県境に近い朝日町の出身で、旧制魚津中学を一九二八年に卒業している。当時広田は未踏の池ノ谷の大滝を登って劔岳に立つことが夢でそのチャンスをうかがっていた。

一九三四(昭和九)年春、大雪で「池ノ谷」の大滝が埋まったとの情報を得ると、広田は、直ちにパートナーの渡邊克己(後に鈴木に改姓)と共に馬場島に入り慎重に偵察の末、4月9日夜半、雪の落ち着くのを待って、土地の獵師も入らぬ、前人未踏の「池ノ谷」の核心部を通過し、左俣を経由して劔岳の頂上に立った。この日の帰路は、長次郎の頭付近で陽が陰るまでかなり長時間雪崩の落ち着くのを待って、デブリの中を往路と同じルートを戻り、馬場島に下山した。この翌々年3月には池ノ谷尾根(劔尾根)の登攀を目指した早大青木茂雄のパーティーが登っているが、広田のパーティーは池ノ谷の初完登者として記録に残されることになった。(池ノ谷の積雪期初完登については、106頁井上晃「池ノ谷の初登頂」(『日本山岳会富山支部創立50周年記念誌』所収)および104頁「四月の劔岳(池ノ谷より)」(『霧氷』2号所収)参照。)

### 1931(昭和7)年～1940(昭和15)年 神山勉の黄金時代

日大山岳部中興の祖といわれた神山勉は、1932年4月予科理科に入学し、その後、工学部の機械科に進むが、担任教授の心配をよそに山岳部のとりことなって留年し、1940年3月まで7年間在学した。神山が尊敬する広田は3年先輩になる。渡邊克己は神山と同学年である。

この時期は初見が北大に進み、広田等3人の富山衆の頑張りがあって部員数も多くなり、山岳部の戦前の全盛時代を迎えていた。

日本大学は創立の経緯から見ても法学部は当然として、創設者山田顕義は参議、工部卿、内務卿、司法卿を歴任した経緯を踏まえ、近代国家に貢献する見地から、高等師範科(現文理学部)、商科(現経済学部・商学部)、美学科(現芸術学部)、医学科(現医学部)、工学部(現理工学部)、齒科(現歯学部)、農学部(現農獣医学部)等と学部が多岐にわたり、地域的にも校舎が各地に分散しており、山岳部の集会を行うにしても一堂に全員が集まるのは難しいこともあり、戦前の山岳部は当時校舎が駿河台にあった工学部学生が主体であった。その工学部にも予科(2年)、予科理科終了後の学部(3年)、専門部工科(3年制)があり、部内誌は予科理科の『霧氷』、専門部工科『氷稜』というように、夫々に発行していた。しかし、これら山岳部は日大山岳部の傘下であり、本部のリーダー会がまとめ役となって、夏山生活、冬山生活、スキー合宿の大きな合宿は運営されていた。当時のことを回想して、「スムーズに連絡がとれて、よくまとまっていたものと感心する」と崎田は述べている。

1935(昭和10)年2月11日には、熊の湯でスキー合宿を行っていた林幹夫以下5名のうちの浅倉栄太郎が、ゲレンデにスキーに一人で出掛けたまま戻らず遭難した。急を聞いて、東京より救援に駆けつけた広田を含む5名の捜索隊は、2月22日に横手山ガラン谷で遭難死している浅倉を発見したが、この捜索にみせた広田の執念は、まさに広田の部員一人一人に対する思い入れを彷彿とさせるものであった。これが山岳部二人目の遭難者となった。

### 1936(昭和11)年 桜門山岳会(日大山岳部OB会)の誕生

この遭難を契機に先輩・現役の間にOB会発足の気運が高まり、大学当局の強い要望や、山岳部部长山岡重知、予科理科山岳部部长相良次郎の両部長からも、OB会の一本化の要請があり、豊島擴、初見一雄、三沢龍雄、平沢

一久、広田賢治、小林太郎、戸村貞夫、福田嘉四郎等を中心に一九三六年十一月九日、「神田北沢グリル」に於いて発起人会を開き、OB会の名称を「桜門山岳会」と決め、取り敢えず事務所を東京市本所区江東橋の戸村宅に置き、ここにOB会は発足した。

折しも1936年は、立教大学隊がナンダコートの初登頂に成功した年であり、当然大きな影響を受け部内誌には渡邊克己が、この遠征は百発百中成功であり、この報告を一日も早く耳にしたい事は誰もが望む所である。(中略)、部内にも遠征問題を研究している人が相当いると述べ、関心の大きさと、当時、当部においてもヒマラヤが視野に入っていたことが伺える。しかし、戦前に日大山岳部による海外登山の夢が叶うことはなかった。

これからという1937(昭和12)年4月6日、劔岳前劔の登りで水越一郎が滑落して遭難死したからである。これが当部三人目の遭難となる。仲間から文ちゃんの愛称で慕われた水越の死は痛手であったが故人の遺を継ぎ、仲間は一層山に精進した。

なお、1940年頃の山岳部は部員も多く積雪期の冬山や春山生活などには、他の大学山岳部と同様、日大山岳部でも現地の案内人(当時は人夫と呼称していた)を同行していた。いちど雇用すると、これが自然と専属のような形となり、日大山岳部では芦峯寺の佐伯文蔵氏を雇用していた。文蔵は戦後には、劔沢小屋の小屋主でもあったので、その後の遭難事故の際などにも大変世話になった。とくに同年輩であった戦前のOBとは心を開いた親友として、晩年まで親しく交際していた。現在、芦峯寺にある佐伯文蔵氏の墓地には、桜門山岳会有志が贈った追悼碑が、その友情の印として残されている(225頁写真参照)。

### 1938(昭和13)～1941(昭和16)年 佐藤耕三の入部

この頃の山岳部には、戦後の山岳部の復興に尽力された部員も多かった。古河正文、窪田宗英、河内邦介、篠田則良、千谷荘之助、津村利男、長岡道男、前田一二、松代正三、菊池典男、福武義夫、置塩光、鞍田昌彦、笹本正剛、土屋秀夫、真島恒雄、富沢潤之助、野田福五郎、藤田達夫、田中昇、新田業、村田顕、松井正、その他枚挙に暇がない。

1938(昭和13)年になって、大阪薬専(私立の大阪薬学専門学校、後に大阪大学医学部薬学科に吸収合併)を卒業した佐藤耕三が三崎町の商学部に入ってきた。彼は山の経験も豊富で、関西の登山界では知られたクライマーであったこともあり、部員も大きな刺激を受け、教えられることも多かった。ややもすれば、長年同じ場所で純粹培養になりがちであった部員は、さらに切磋琢磨するようになった。

1939(昭和14)年12月には神山をリーダーとして天狗の科尔から槍までの極地法登山を実施したが、この冬は例年に見られない悪天候の連続で、C1予定地の天狗の科尔にも登れず失敗に終わった。

そこで、年が変わって三ヶ月後の1940(昭和15)年3月15日～4月2日にかけて、佐藤耕三リーダー以下20名が同ルートで再攀を図り、極地法により岳川谷BC～天狗の科尔～奥穂～北穂～槍を余裕をもって成功した。この成功により部員の志気も大いに高まった。

リーダーの佐藤は“我々の行った登山は、大きな山を仮想しての訓練というような意味ではなく、最も安全確実に穂高を経由して槍ヶ岳に登るための手段に過ぎず、そこには一点の無理もない、団体的な強大な闘志がひそんでいたことを見逃すことは出来ない”と述べている。

佐藤は、その余勢を馳って薬専時代から狙っていた、当時未登攀であった不帰二峰東面バットレスの登攀に出か

けている。メンバーは石田克己、平野数雄、(後に本片山と改姓)神保琢磨の4名、出発は穂高生活から帰京して1ヶ月もたない4月29日。5月2日、登攀にかかった。晩春とはいえ雪は多く登攀は予想より時間がかかり、途中でピバークとなり、アイゼンを着けたまま、その上ザイルでピレーして一夜を明かしている。翌5月3日、二峰頂上を踏み、初登攀を成しとげた。その後、このルートは、不帰岳周辺の登山史を調べている独標登行会によって、「不帰二峰東面バットレス日大ルート」として、初登攀が認知されている。

しかし、それから四ヶ月後の1940年8月13日に穂高夏山生活終了後の第二次奥又白合宿中、前穂四峰壁で将来を囑望されていた入来重弘、上関徹也の両部員を転落事故で失ったことは痛恨の極みであった。

当時の部の状況について1941年卒のCL崎田熙は“その頃戦争は迫っていたが、それ程切迫感もなく、山にはよく出かけていた。日大山岳部としての部室はなかったが、神田神保町の交差点の角から二件目にあった「万崎」デパートの四階にある食堂によく集まっていた。というのはその食堂の一角に、十畳ほどの部屋があり、その部屋をいつのまにか山岳部が占領して集まっていたのである。場所もよく、食事も出来るので大変便利だった。ここに行けば必ず山岳部の誰かがいるという具合で、ここが山岳部の部室代わりになっていた”と述べている。

一方、器具、装備類は、工学部の駿河台校舎の廊下の突き当たりの大きな木箱に収納していた。

翌春の春山合宿は1941(昭和16)年3月17日～4月5日、豪雪で知られる東北の飯豊山で行われた。リーダー崎田熙以下18名は、福島県側の小荒集落の猪俣政次郎宅に宿泊して荷物の仕分けを行い、極地法でキャンプを進めたが、何にしおう豪雪地帯、その上、連日の悪天候で思うようにキャンプは進められず、C3から大日岳頂上に達するのが精一杯で、時間切れのため下山することになった。

## 1941(昭和16)年3月～1945(昭和20)年8月 戦時中の山岳部と休部

以後終戦までの戦時中の山岳部は、崎田熙(昭和16年卒)から、遠藤二郎(昭和18年卒)、湯浅英世(昭和19年卒)と部のバトンは引き継がれた。

1937(昭和12)年の盧溝橋事変に端を発した日中戦争は、徐々戦線が拡大され、1938(昭和13)年4月には国家総動員法が公布され、5月には、その最初の発動として、工場事業場管理令が公布、工場等への学徒の動員が始まった。1940(昭和15)年9月には日・独・伊三国同盟が調印、1941(昭和16)年に入ると、日米間の関係が、風雲急を告げるようになり、7月11日には、文部省より『在京学生の離京禁止(禁足令)、合宿等の禁止令』が文部次官通達(7月1日付)という形で発令された。「時局の緊迫に鑑み、学徒の運動試合、合宿遠征等を一切中止して、待機の姿勢をとるべし」と言うだけで具体的な説明のない通達は、真剣に夏山合宿の準備をしてきた部員達にとっては、納得しかねるものではあったが、時勢のおもむくところ如何ともしがたく、断念せざるを得なかった。

文部省から団体行動が規制されたこの年は、ほとんど山に行けず、マラソン等で非常時にそなえ訓練を行っていた。これに対し大学当局は、文部省の方針にもとづく学内新体制のため、運動部は報国団(隊)結成のため解散を命ぜられ、非公認となったために、5月以降は、部内の統制力は弱まっていった。そのこともあって、8月以降は少数による個人山行が行なわれるようになった。その中、工学部機械科の大木彦久他2名が、10月18日、白馬大雪渓を詰め白馬岳と杓子岳の最低鞍部付近で、吹雪かれて疲労凍死する遭難事故を起こした。本人等の経験不足が直接の原因ではあったが、遭難者を出すことは絶対にせねばならない非常時での事故であっただけに、弁解の余地のない遭難事故であった(日本山岳会『会報』116号1942年4月号参照)。

その年の12月8日には太平洋戦争が勃発し、すべてが戦争一色となった。1941(昭和16)年も押し詰まった12月24日には、文部省は、全国の学生の体位向上と練成の徹底を目的に、「大日本学徒体育振興会」を発足させた。各競技スポーツ団体は、直ぐに、の傘下に入ることになったが、文部省当局は、学生山岳部だけは特別扱いで、「大日本学徒体育振興会山岳部」が傘下に入ったのは、1年後の11月であった。この組織は、橋田体育振興会会長(文相)が楨有恒以下次の委員を指名し、1942(昭和17)年11月6日正式に発足した。委員は、渡邊八郎、西堀栄三郎、今西錦司、本郷常幸、堀田弥一、伊藤秀五郎、初見一雄、中屋健弼、織内信彦、の9名であったが、我が初見OBの名前も入っている。このように橋田文相が選んだ委員には当時の登山界の重鎮が網羅されていた。

太平洋戦争勃発後、緒戦における戦況は比較的順調に推移したこともあって、小グループでの登山は続けられていた。1942年4月28日、文部省は、体育局運動課長北沢清の名で、東京都下の学校山岳部の部長と一名の山岳部学生幹事を文部省に招集し、学校山岳部のあり方についての文部省としての指導方針の説明を行なった。この内容については、日本山岳会『会報』118号(1942年7・8月号)に、当時、東大生だった中村徳郎氏により紹介されているが、それによれば、北沢課長は、学徒と登山、国外遠征のこと、学校山岳部に関して、行政的な問題、学業と山と、資材について、関東高校山岳連盟について、日本山岳連盟について、など戦時下の登山についての文部省の方針が、項目別に詳細に説明されていた。北沢課長は、長らく陸連の役員もされたことがあり、登山も好きで、学生時代には穂高で岩登りも行なった経験もあり、その後、欧州在勤の際には、アルプスの一端にも足跡を残されている。大学・高校山岳部の本質を理解された上で、当時の学校山岳部に対して適切な方針を出されていたので、少し長くなるがその要旨を紹介しておきたい。

「我々は何故山へ登るか。山が好きなるが故に山に登るのである。実際には山への行き方も各人各様に異なるであろう。かくして心身の鍛錬ということも、その目的・効果の一つたり得るであろうが、結局山に登ること自体が、純正な登山の目的である。国家目的に合致するというのならば、いよいよ結構なことであり、文部省としても当然そうあることを希望し、且つその実現のため、支援を惜しむものではないのである。しかるに曰く教養を高めよ、卒業を早くせよ、卒業したら直ちに軍教育を受けよ。それがためには、強健な体を鍛えておけ...云々と。一方学用品は不自由であり、運動するにも道具がなく、運動すれば、飯が足らぬという障害が起こりがちである。それらの事の為に萎縮するようであってはならぬ。単に登山の効果的方面のみについて考えても、登山や、探検に対する理解や知識なくしては、今後大東亜共栄圏の指導など出来ないことは明瞭である。

山へ行くことは、その者にとっては全生活そのものである。実際に山に登るときだけではなく、平生に於いても精神的にも、肉体的にも山に登る心構えを持ち、また実際山に登るためのあらゆる準備を怠ってはならない。現在の日本は、一人でも多くの教養ある人物を必要としている。従って、このような時局下に遭難者を出すことは絶対に防止しなければならない。万全を期して行くべきである。然る上にも不可抗力の遭難があったなら、これは已むを得ない。その人は誠に気の毒である。我々は、更にそれを綿密に研究して後に資することを忘れてはならない。尻込みしたり、恐れをなす如きだらしないことであってはならぬ。勇敢に積極的に進んでもらいたいと思う。

更に各論について言及すれば、我が軍の制圧地域がヒマラヤの近くまで拡大したことによって、その高峰登山も身近なものとなり、当該地域への国外遠征(学術調査・探検)も、副次的には国防的使命と効果も期待できる。学校山岳部での登山訓練を通じて得られた、高度な技術と崇高なる登山精神は、将来、指揮官として、必ずお国のために役に立つ。学徒は学問に励むことが、本分であるが、真の山登りを通じて得られた文武両道の体験は、立派に学問に準ずるものである。山登りには、ザイルなどの装備が必要であり、費用もかかる。文部省はこれらの経済的負担をサポートすることも考えているし、食糧などの支援も行なう用意がある。各学校の山岳部は、夫々自主的に各々の道を歩んできた。登山と言う特殊な性質から見れば、そうあって欲しい。むしろ各々特徴を生かして運営してもらいたい。た

だ、お互いに共通の問題(資材の分配など)のためには、現在は、関東の大学山岳部には横のつながりがないので、連盟のような横の組織も必要ではないか。体位向上を目的とした単なるハイキング的なことは、厚生省傘下の組織に任せればよい。学校山岳部はこれら一般登山者に対する援助・指導にはむしろ進んで協力して欲しいが、本来の目的だけは忘れないで欲しい。」

戦線が拡大し、これから益々困難な時期を迎えようとしている時でもあったが、アルピニズムの精神を忘れていない文部省体育局運動課の考え方には、各大学山岳部とも大いに励まされた。

1942(昭和17)年4月には、艦載機により東京が初空襲されたが、5月には戦局が一時好転したかのごとく見えたこともあり、日大山岳部でも小グループで4月に富士、谷川岳、甲斐駒、5月に穂高への山行を行なった。7月には文部省の特別の計らいで米の特配を受けて、坂省三リーダー以下28名で例年通りの夏山剣沢生活を実施することができた。

しかし6月のミッドウェー海戦後、戦局はますます厳しくなってきた。12月にはガダルカナル島の撤退が決まった。

この頃には部の集まりも交番に届け出なければならず、山岳部の集会中に特高警察に踏み込まれたこともあった。その頃の議論の中心は"生と死"の問題で、「山での死、戦場での死」について真剣になって討議した。結論としては山で十分に体を鍛え、また登山を通じて習得した山登りの戦略や戦術等の技術は、軍隊に入ってから必ず役に立つと思われるので、堂々と山に行こうではないか、というものであった。

10月2日には在学徴兵延期臨時特例(文科系学生、生徒の徴兵延期停止)が公布され、文科系の学生には召集がかかり戦地へ赴く者も多くなったが、工科系(工科系と医科系は入営延期ができた)の部員が多かった我々の部には、残っている部員も多く山岳部の活動は続けられており、1943年3月には北尾根から奥穂への極地法が行なわれた。5月には谷川岳、6月には前穂高奥又白、7月には剣沢に入山し夏山生活を行なったが、これが戦前の最後の合宿となった。

同年10月21日、神宮外苑の競技場で、文部省主催による出陣学徒の壮行会が行なわれた。11月17日には、日本山岳会学生懇談会に關係のある学徒の壮行会が日本山岳会主催により、産業組合中央会館に於いて開催され、木暮理太郎会長の代理で出席された 楨有恒副会長が壮行の辞を送り、出陣する学徒を激励した。

日大山岳部は1943(昭和18)年11月11日、千住柳原の神山OB宅に關係者が集まり、戦局に鑑み山岳部の活動を休止することにした。

部員の中にはピッケルを銃に持ち替え、敗色濃厚となった戦線に出征し、二度と祖国の土を踏むことなく亡くなられた先輩も増え、十三名に達しました(下記)。心よりご冥福をお祈りします。

西村重行(昭和17年フィリピン島)、飯高望宏(昭和17年6月20日ビルマ)、野沢流磨(昭和19年8月5日)、川崎信三(昭和19年12月28日)、馬淵龍彦、大林力、川西岩夫(昭和20年8月瀋陽)、吉田博男、相模悼、南正秋、三田貞夫(レイテ島)、上江田清広(沖縄本島)、飛田実(ラバウル)。

一方、山岳部の活動ではないが、学徒動員で後樂園にあった陸軍軍需品廠建築研究所に勤務していた宮本幸男は、軍の要請により、1945年1月に岳友の素木喬三、大島直行にも協力を依頼し、磐梯山の南麓、猪苗代湖畔にある丘陵地帯で、翁島の旅館をベースに、雪洞やイグルーを応用した雪中露營の研究に没頭していた。この計画には

総員30名が動員され、これを指揮したのは、当時陸軍中佐であった那須川渡氏(日本山岳会会員で東北大学山岳部OB)であった。「スキーで釣ったみたいで申し訳なかったが、陸軍の被服廠が持っていた冬の露営装備の殆どが満州の関東軍に送られており、国内には殆ど無くなってしまった。そこで冬の季節、軍が移動する場合を想定して、グラウンドシートと毛布だけで雪中露営、つまり寝泊まり出来る方法を実験・研究して欲しい」とのこと、木炭を焚いて暖をとると、一酸化炭素中毒になり易い。それにはビタミンB錠剤の大量投与が効果があるとか、これに関連して、イグルーや雪洞のための「雪の強度」の研究のため、当時、駒込にあった理研の黒田正夫博士のもとに通い、霜柱や凍土および雪が融ける際の引張り強度等についての指導も受けていた。

1945(昭和20)年は米軍の沖縄への上陸、3月10日、5月24日両日の東京大空襲に続く激しい空爆により、日本の主要都市は焦土と化し、8月6日広島、8月9日長崎への原爆投下の後、8月15日の終戦を迎えた。ここに昭和の激動史とともに翻弄された山岳部は創部22年にして、部の活動を休止せざるを得なかった。

## (二)戦後の再建・充実と挫折の時代(1946～1958)

### 1946(昭和21)年 戦後山岳部の誕生

1945(昭和20)年8月15日に終戦を迎えた日本大学では、終戦から8ヶ月後の1946年4月になって、学内の文化的な活動が、一斉に再開された。スポーツ部門は、戦前の運動会を改めて体育部(現保健体育審議会)を創設し、各種スポーツの再建にとりかかった。

そのような中、4月末に戦前の山岳部とは全くつながりを持たない、文化系の学生によって山岳部は立ち上がった。法文学部の秋庭鉄之は、山岳部だけが誰も名乗りあげないことに業を煮やし、事務的なことは苦手であったが、10名程の幽霊部員を募り、1万9千円の予算書を作り、予算会議に出席した。結果は2千円位に減らされて、だいぶ憤慨したものの、ともあれ山岳部は、体育部の一員として認知され、新しいスタートを切ることができた。

そのとき、片腕となって協力したのが、同じ法文学部の山口慎郎であり、彼は上に立つことには無頓着であったが、独特の政治力を発揮して、殆ど一存で法文学部の四階36講堂を、部室として確保することに成功した。戦後の混乱の中、山に登ろうという情熱とそのバイタリティーは高く評価される。

一方時を同じくして、神山OBは、神田三崎町の法文学部に、新しい山岳部が創設されたことを耳にするや、戦前から続いている伝統ある日大山岳部と、全く別の山岳部ができて困ると思い、直ちに金坂OBに連絡をとらせ、まだ卒業していない戦前派の横沢、素木、帆足、森下等を動員して合流させるよう働きかけた。

この神山OBの”部の歴史を戦後につなげなければならない“という意向は、金坂OBにより、時を逃がさず実行に移された。戦前派の参入には、戦後にできた論客の多い山岳部にとってはかなりの抵抗があり、喧喧愕愕の議論がなされたが、それを調整したのが、前記の秋庭であり、波風がたたないようにまとめたのが戦前派の横沢であった。この戦前派、戦後派の合体にあたっては、神山、金坂両OB、横沢、秋庭両現役の四人の存在で、中でも現役部員の融和に努力した横沢、秋庭の二人の人柄によるところが大きかった。

このようにして、戦時中、大宮の上関宅に疎開しておいた器具も新部室に戻り、部員募集も活発に行なわれた結果、娯楽やスポーツに飢えていた若者がどっと入部し、ここに戦後の新生山岳部はスタートすることになった。

1946年5月には、戦後初の合宿が、新緑の谷川岳で行われた。金坂OB以下数名のOB参加のもと、新旧部員20名が参加、雪渓訓練を主な目的として行なうことができた。

引き続いて7月には、夏山生活が、剣沢三田平で行なわれた。参加者は、森下吉雄、横沢利武リーダー以下20名のほか金坂OBはじめ戦地より復員してきた先輩が、多数参加して行なわれた。

雪渓訓練、夏道から木剣～長次郎谷下降、ハッ峰、源次郎尾根の登撃と、一通り計画をこなすことができ、山岳部らしい形が整った。当時を振り返って横沢は、「よくまあ、あのような粗末な装備と食料で、剣岳に入ったものだ」と述懐している。

なお、戦後の山岳部には、町の山岳会出身の者も多く、彼等の中には先鋭的な岩壁登攀を志向する者もいたが、この中の何人かは、夏山生活後に社会人団体の「日本山嶺倶楽部」等へ移っていった。他にも新人の中には安易な気持ちで入部した部員が多かったためか、夏山が終了すると新人部員の大半が退部してしまった。しかし、この夏山で山岳部の基盤を、曲がりなりにも確立することができた。

### 1947(昭和22)年～1949(昭和24)年 戦後初の遭難からの再出発

この夏山が終わって、減少した部員をカバーするために再募集した結果、1946年11月には石坂昭二郎、岡本如矢、芝田稔等を含め、将来を担える多くの部員が入部し、更に翌1947年4月には北村 二郎、松田雄一をはじめ、山岳部員として残りそうな部員が相次いで入部した。一方この時代には、リーダーの弱体をカバーするために、戦前のOBが多数、合宿に参加したことにより部のレベルが、短時間のうちに向上し、このようにして1948年の年末から1948年の年始にかけて、ともかく冬山穂高生活が行われ、西穂高、前穂高北尾根等を登攀することができた。引き続き3月には、卒業した横沢、森下等に代わって、戦後派の石坂リーダーのもと、春山横尾生活が行われ、奥穂高、北穂高に登ることができた。

そのような中で、1948(昭和23)年の7月21日、夏山剣沢生活中に、新人部員の伊地知宏が、ハッ 峰ニードル付近の雪渓で滑落死する事故が発生した。この遭難事故を通じて、リーダーの実力不足が指摘され、これを契機に戦前のOBによるリーダー養成の再教育が行なわれ、山岳部は、初心にかえて再出発することになった。

1949年大学当局は、体育部を発展的に解消し体育会に改組、体育会規定、体育会事務局規定を制定した。そして迎えた積雪期は1949年1月3日～1月8日神城でスキー合宿、引き続いて冬山生活を1月9日～1月17日まで遠見尾根より五龍岳を目指し、高所雪中露營に自信をつけた。

引き続き、春山生活もCL石坂以下10名で、3月28日～4月16日、極地法により遠見尾根より五龍 岳経由鹿島槍を目指した。後に、この合宿に参加したメンバーが、それから二年にわたり戦後の再建の中心的な役割をはたすことになる。この合宿は背伸びしようとしていたリーダー・クラスの自信を打ち砕くものであった。中でも、高所露營については、器具の点検不十分が原因で、五龍岳頂上のテントは強風によりズタズタに引き裂かれ、雪洞を掘ってそこに避難し、二つしかない一人用シュラフに、各々二人が入るという有様であった。このような劣悪な条件下にもかかわらず、アタック隊は前進し、八峰 キレット小屋の付近に雪洞を掘り、帆足、丸山、松田、山本(晃)の四名が入った。しかし期待した翌日も天候に恵まれず、アタック隊は、登頂への最後のひと踏ん張りがきかず、八峰キレットを越えただけで引き返した。しかし、全員が精一杯の頑張り、稜線上のキャンプに第一歩を印した感激は大きかった。

迎えた1949年度は、学制改革で新人部員の入部こそ少なかったが、石坂、岡本、丸山、北村、松田の五名によっ

て、待望のリーダー会が誕生した。5月15日には、鈴木克己OBの世話で、関東、関西の間である静岡県掛川在の真砂鉱泉で、OB、学生合同懇親会が開催され、良き時代の部長であった相良先生、望月先生のご子息、瀬能部長はじめOB17名、学生4名参加のもと、昔の山岳部を再現したような大変意義ある楽しい集まりであった。

5月の谷川岳マチガ沢での合宿に続き、夏山劔沢生活、4パーティーに分かれての縦走の後、石坂、松田の二名で、8月上旬に、来るべき冬山の偵察のため天上平生活を行ない、冬季の北鎌尾根に対する自信をつけて下山した。帰京後、当時大町に在住しておられた横沢OBを監督に祭り上げて、趣意書までつけた計画書を作成し、諸先輩に送付して援助を要請したところ、諸先輩から総すかんを食ってしまい、ここにはじめて伊地知を失って以来の部が、少しも進歩していない事実を、あらためて思い知らされ、愕然としたのであった。詳細は、横沢OBから、桜門山岳会理事長宛の書簡「北鎌尾根計画について」(「会報」6号所収)を参照願うことにするが、要約すれば、曰く「全体として、何か興業的な感じを受けて非常に残念」「冬の北鎌をやるうという純粋に、謙虚な態度が感じられない」「極地法と言う形式に捕らわれ過ぎている」「本当に北鎌をやるうと言う下からの盛り上がりを感じられない」とする計画の見直しを要望するというのであった。

これを受けたCLの石坂は、事態を重大に受け止め、「あくまで計画を押し進めるべきか？ それとも中止すべきか？」、複雑な気持ちを抱いて、部員16名で、紅葉の美しい奥日光の光徳沼へ出かけ、毎晩おそくまで、焚き火を囲んで真剣に論じ合った。その結果、四日目の晩になって石坂より「中止して内 部を固めるべきだ」との発言に全員が賛同して、気分を新たにしてお直すことを確認しあった。

11月の富士山合宿は、17名参加の下、期間を一週間に延ばして実施し、久しぶりに内容の充実した合宿な行なうことができた。そして年末には、戦後五回日の本格的スキー合宿を、静かな場所を求めて万座温泉で行ない、その後遠見尾根と八ヶ岳に分かれて春山の劔岳へと結集することになった。

この頃、神山OBも時々部室に来られて、劔岳についての貴重な助言をいただき、また劔岳に詳しい広田OBのお宅に伺って、弥陀ヶ原や劔沢で吹雪かれた時のルート上の注意点、たとえば、目標の石、樹木に至るまで細部にわたって説明してもらい、今更のように劔に打ち込まれた先輩の情熱の深さに 思いを致したのであった。あとは自信をもってぶつかるだけであったと当時のCL石坂は述懐している。

かくして1950(昭和25)年度の春山合宿には、CL石坂、岡本、丸山、北村、松田、山本(晃)、堀口、安藤、脇田の9名が参加し、別山乗越小屋をBHとして平蔵のコルに前進キャンプを出し、更に長次郎右俣のコルに雪洞を設けて、本劔、ハッ峰、源次郎、大窓の頭、池ノ谷左俣下降右俣登攀、黒部別山、雄山東尾根、大日岳と一ヶ月にわたり多くの足跡を残し無事下山することができた。この合宿に於いて部員の自信はゆるぎない大きな力として、以後我々の部の山行の根底をなすことになったと石坂は述べている。

## 1950(昭和25)年度 北鎌尾根から奥又白の充実した時代

引き続いてCL石坂のもと、年初より冬山の目標を、極地法による北鎌尾根から槍ヶ岳経由北穂高の往復とし、年間の計画を通じて常に北鎌の研究・偵察・荷上が加味されるなど、部の総力を上げて北鎌に向けられた。この計画の立案者の一員である松田は、戦後の山岳部においては、厳冬の北鎌尾根から槍ヶ岳を越えることが一つの目標とされており、これが山岳部のある段階を画する階程であったと述懐している。また、ルートを北鎌末端からでなく独標側稜としたことについて、末端からの這松帯を登るよりも、未知のルートからの挑戦に魅力を感じたからであったと述べている。

1950年12月9日出発した、参加者CL石坂以下15名は、高瀬川上流天上平にBHと30人用家型天幕を設営し、

独標側稜2650m地点にC1-Aを、独標にC1、北鎌平にC2、南岳にC3を建設し、悪戦苦闘の末、第一隊の松田、堀口、第二隊の北村、志水の4名が翌年1月4日北穂頂上に達することができた。それから撤収下山にかかり1月19日に長かった40日におよぶ合宿を終え大町に下山した。各人が大きな荷物を背負って大槍を越すことができた喜びは大きかったが、極地法の運行面においては未完の感が深く、石坂は、この問題の解決は、次年度の北村、松田に託すことにした、と述べて卒業することとなった。(詳細は123頁の『北鎌尾根より北穂高岳』参照)。

この北鎌合宿は、戦後の山岳部が漸く戦前のレベルに達し、戦後の大学山岳部にあっても、他大学のレベルに達しつつあるとの自身をつけた合宿であった。

次の春山合宿も再び劔岳が舞台となった。前半のスキー合宿を1951年3月21日から、L北村以下16名で実施した。金坂OBもスキー・コーチとして参加し、弥陀ヶ原、追分小屋でのスキー合宿に続き、後半は場所を別山乗越小屋に移し、4月2日～4月15日、劔岳周辺の登山を、L北村以下11名で行った。

松田以下7名で三張りの天幕を劔岳頂上に設営、ここをベースに劔尾根取り付きから劔尾根ギャップに達して、劔尾根の偵察を行った後、長次郎の頭から劔尾根ドーム往復、池ノ谷左俣下降・右俣登高、八ッ峰上半などを登攀し無事下山した。

L北村は目標の高所幕営訓練では、北鎌の経験から劔岳頂上と決し、徹底的に新人を訓練しようと試みた。絶えず吹雪とガスに悩まされての行動は、貴重な体験を積み、成果の上がった合宿であった。

## 1951(昭和26)年度

引き続いてCL北村二郎、松田雄一に一年後輩の山本晃弘、堀口章宣、鹿島英功が部を率いてゆくことになった。年初より冬山は北鎌に続くものとして続くものとして、奥又白池から槍を極地法で往復する構想を持ち、これに加えて、前穂高の第2キャンプからは前穂東壁を分散登攀しようという計画であった。極地法を採用したのは、北鎌で宿題として懸案となったスムーズな運行を確率するための試みでもあった。期間は1951年12月5日～翌年1月4日の一ヶ月、参加者はL北村以下12名、BHを徳沢小屋、松高ルンゼ出合の台地に荷あげの中継のための無人のC A、奥又白にC A、沢経由前穂頂上にC A、奥穂頂上にC A、北穂頂上にC Aを建設し、12月25日山本(晃)、小金井の2名が北穂より槍ヶ岳の往復に成功した。その間、12月18日には、前穂北壁を松田、堀口、Aフェースを鹿島、小金井、三峰リッジを北村、山上が北壁隊支援のため登攀した。しかし、反省点も多々あった、その第一点は奥又白のテントが雪崩で埋没したこと、幸い大事には至らなかったが、一歩間違えば惨事となるところであった。第二点はC Aのスキーデポが雪崩で流されことである。

この計画は、いろいろと問題の多かった山行ではあったが、ともかく、昭和15年8月に前穂四峰フェースで遭難死された入来、上関両先輩のケルンの前で、全員無事下山の報告ができたことは幸いであった(詳細は131頁の『奥又白谷より穂高、槍』参照)。

後になって、松田は、1950年3月の劔岳、1950年12月の北鎌、1951年4月の劔岳、1951年12月の奥又白、この二年にわたる四つの積雪期登山で遠見尾根以来の課題であった高所露営については、ほぼ完成の域に近づいたことと、極地法についても、高所順応の問題を別にすれば、そのままヒマラヤ登山にも通用するレベルにまで達したのではないかと述べている。

私は"戦後の再建と第二期充実の時代"を築いた先輩たちは、戦前よりもはるかに劣悪な装備と食料で、何故これ

ほどまでに頑張れたのだらうと考えてみたが、明確な答えは得られなかった。「より高き、より困難な山登り」を追い求めた結果なのだろうか？

この点については、戦後少しでも早く戦前のレベルに戻れるようにと、神山、金坂OBをはじめ多くの先輩各位の物心両面にわたる援助があったことを忘れることはできない。

## 1952(昭和27)～1956(昭和32)年 試練のコブ尾根時代

1952(昭和27)年度はCL山本(晃)、堀口、鹿島にリーダー会は引き継がれた。

この年の新人部員に、慈恵医大の付属高校から、文学部へ入学した遠藤友美恵が入部を希望してきた。彼女は高校時代に慈恵医大の山岳部員と山行を行っており、日大に進学して、早速山岳部に入部を申し込んできた。当時は早稲田大学や明治大学の山岳部にも女子部員が入部しており、あらゆる分野で男女同権が叫ばれており、山岳部としても断る理由がなかった。当時のリーダー会としても諸先輩に相談して慎重に検討したが、熟慮の末、入部を認めることになった(彼女は2年部員になるまで在籍したが、途中で部を離れた)。

6月の初夏穂高生活終了後の分散縦走では、槍沢から水俣乗越を越えて高瀬川を下山する予定のパーティが槍沢小屋に宿泊したが、翌朝同宿者一名を残して出発した後に出火焼失した。その後の対応が悪かったため、出火原因・火元不明のまま小屋主より当部の責任を問われ、部としても対応に苦慮した事件があった。

より困難な高みを目指す大学山岳部としては、たとえ季節外で無人の山小屋があったとしても、安易に山小屋を無断で使用すること自体に問題があり、生活技術の程度のわからない同室者に、後始末を任せて出発してしまうなど道義的責任を果たしておらず、その後の検討会でも、本件は、一見対外的問題のように見られやすいが、本質的には部内の教育やモラルの問題であることが指摘され、根本から再教育することになった。

この後、OB参加のもと、上級部員の弱体を補うため、リーダー教育などを実施して夏山を終え、そして迎えた冬山では、ここ数年の間、団体行動重視で行ってきた極地法の欠点を補う意味から、各個人の自主性を尊重して、リーダーシップ、登攀能力の向上、チームワークに重点をおいて、穂高の岳沢をベースに冬山生活を行なうことになった。

計画の前半は、間ノ岳側稜から極地法により北穂往復(同時に1年部員全員の奥穂登頂)を計画した。堀口、平林のアタック・パーティーは、短期間で北穂頂上に達して帰途についた。そして1年部員をつれて奥穂に登ってきた山本(晃)パーティーと奥穂の山頂で合流し、成功裡に前半の計画を終了することができた。しかし、後半のコブ尾根、畳岩尾根の分散登攀の計画では、12月30日、コブ尾根の通称、這松の頭付近で、アンザイレンしていた平林良一、小金井清治が、雪庇を踏み外して、二人とも扇沢側に転落し、平林が重傷を負った。そのため、直ちに計画を中止して下山したが、このときには、上高地帝国ホテルの木村殖氏に大変お世話になった。

このように合宿の目的とは裏腹に「個」としての力不足を露呈してしまい、予定していた次期リーダーの平林が、不測の事故を起こしてしまった。そのためCL山本(晃)は、不本意なかたちで、次期のリーダーを3年部員の梅松延頼、安田敬三に引き継ぐことになった。

## 1948(昭和23)～1953(昭和28)年 日本山岳会「山日記」とマナスル

一方、日本山岳会では、戦後の再建の一環として、戦中～戦後にかけて5年間休刊していた「山日記」の編纂に取りかかっていた。戦後の第一号として復刊された「山日記」第14輯の編集委員は、谷口現吉、林和夫、千谷壮之助、金坂一郎、津村利男、村田顕、神山勉の7名(うち日大OBは5名)で構成されていた。この編集代表谷口現吉氏になっていたものの、実質的には神山OBが編集長であった。日大OBを主体とする編集委員は戦後の混乱の中、現地調査・情報の収集と、仕事を投げ打って奔走し、その結果、1948年11月には、予定通り茗溪堂から発行することができた。日大グループは、引き続き第15輯(1950年版)、第16輯(1951年版)の編集も担当して頑張ったが、同時に日大グループの力も、関係者の間で大いに評価されることになった。

日本山岳会発行の『山岳』第44年第2号に掲載されている「日本山岳会図書室再建報告」によると総工費68万円のうち、建築費に五十五万円かかっており、この費用には、山日記第14輯の印税25万円が当てられた、と記されている。あの御茶ノ水にあった日本山岳会ルームの再建には、日大グループが大きく寄与していたことがわかる。

この編集の最中に、日本山岳会ではマナスル登山の計画がにわかに具体化し、1952年の秋にはマナスル踏査隊派遣が決定され、その成果を踏まえて、その秋には第一次マナスル登山隊の準備が開始された。そしてこの『山日記』の編集に活躍したOBの御蔭で、日大OBの石坂、松田の存在が知られるところとなり、1953(昭和28)年第一次マナスル隊に石坂OBが参加することになった。石坂は5月31日加藤喜一郎、山田二郎両隊員と共にアタックに出発し、正午に7750㍉に達し、それが、この登山隊の最高到達点となった。この石坂OBの第一次マナスル隊参加は、われわれにとっては夢に近かったヒマラヤが身近なものと感じられる契機となった。続く1954年の第二次マナスル登山隊には、松田OBが、1956年の第三次マナスル登山隊には、千谷、松田面OBが、日大グループから参加できたが、その原点は『山日記』の編集にあったといっても過言ではない。

## 1954(昭和29)年度 富士山雪崩遭難

引き続き梅松、安田(敬)、それに三年の大鷲正芳、平山善吉、田中省三がリーダー会に加わってスタートした。秋山までは順調に計画を消化していたが、富士山の合宿では、一月28日午前10時40分頃、富士山吉田大沢に大規模な雪崩が発生し、夏道七合目下から大沢にトラバースをしようとしていた東大スキー山岳部11名中5名、六合三勺小屋付近を登高中の慶応医学部山岳部3名中2名、鎌岩尾根から夏道を下降中の日大山岳部24名中8名の合計15名が、死亡、行方不明になるという日本登山史上最大の惨事となった。

早速、大学本部に遭難対策本部が設置され、直ちに在京の現役OBによる救援、捜索隊が現地へ向かったが、その後、日本山岳会を中心とする各大学30数校、地元警察署、消防署、自衛隊、地元民、警察犬等が捜索に大動員された。翌年6月3日に最後の小松利郎の遺体発見で、遺体捜索は終了したが、この間、日大、東大、慶応の3大学合わせて捜索人員は延べ3181人にのぼった。当然、マスコミも連日報道することになり、当時は大きな社会問題になった。日大の遭難者は梅松延頼(4年)、上田浩史(2年)、石井宏正(1年)、小松利郎(1年)、高野隆次(1年)、近澤俊明(1年)、塚本道一(1年)、細川儀一(1年)の8名であった。

チーフリーダーの梅松は長野県立須坂西工高校2年のときから、日大の万座スキー合宿、高3の夏には、日大の槍ヶ尾根天上平生活に参加するなど青春の全てを、日大山岳部と共に過ごしており、先輩からも将来を嘱望された、稀れに見る優秀な部員であった。上田以下の部員はこの優秀な梅松リーダーのもと、日大山岳部に自分の夢を託すべく日夜研鑽に励んでいたが、志なかばにして、霊峰富士で若い命を断つことになった。この不慮の死は、本人の無念さは勿論のこと、ご遺族にとっても、筆舌につくせぬ痛恨事であった。

我が部にとっても、一挙に8名の部員を失ったことは、壊滅的な打撃であった上、並行して長期間にわたる、捜索の

続行という困難に直面することになったが、残された部員は、大蔭、平山新リーダーのもと以前にもまして自然への畏敬の念をあらたに、山への探求心を高めていった。

勿論、部の再建には現役部員のみならず、大学本部の理解と協力、金坂一郎をはじめとする多くのOBが、仕事を投げ打ってまで協力を

されたことは忘れることができない(詳細については138頁所収の『富士山での雪崩遭難について』参照)。

この年は松田OBが第二次マナスル登山隊に参加した年でもあった。今度こそは登頂をという期待が大きかったが、山麓サマ村の住民による登山阻止に会い、BC建設すら叶わぬまま、ガネシュ・ヒマールー峰(7429<sup>㍉</sup>)に転進することになったが、ガネシュ・ヒマールでも登路が見付からぬまま、登山の時期を失し、無念の帰国をすることになった。

## 1955(昭和30)年度

4月には大学山岳部の宿命として新入部員を迎え入れなければならず一刻の停滞も許されなかった。遭難直後からCLとなった大蔭と、平山、田中がリーダー会を引き継いで新年度を迎えた。

幸い遭難の直後にもかかわらず22名の新人部員を迎え、5月7～8日、総勢39名で、新人歓迎山行を入笠山で行ない、新年度のスタートを切ることができた。

一方、遺体の捜索は4月以降、第5回～第10回まで継続して行なわれ、前述のとおり、6月3日の小松部員の収容を最後に終了し、6月7日には大学本部の会議室で捜索委員会の解散式を行なった。

その後、遭難の追悼集「富士に眠る仲間へ」は金坂一郎、松田雄一、小金井清治、安田敬三の各OB、大蔭正芳、平山善吉、青木重雄、深瀬一男、宮原巍の各現役との共同編集により、この年の遭難一周忌に当たる11月28日に発刊された。本書は365頁よりなり、ご遺族の要望もあり、単に追悼集に終わることなく、今回の雪崩の考察や、捜索の経過を詳細にまとめて編集されたので、冬富士を志す登山者にとっては、大変参考になる必読の書となった。

一方、学生の方は、三ツ峠岩登り訓練、劔岳夏山生活と後半の縦走、富士追悼ケルン建設山行、秋季天幕懇親会、秋山穂高横尾生活、富士山合宿、遠見尾根から鹿島槍への極地法による冬山山行、志賀高原スキー合宿、春山劔岳生活と、切れ目なく部の活動が行なわれたが、この点についてはCL大蔭をはじめとする新リーダー会の努力に負うところが大きかった。とくにCLの大蔭は、創部者豊島の出身校旧制大町中学の後輩でもあり、創部以来最大の困難に直面した日大山岳部の危機を不屈の精神で切り抜けたことは賞賛に値する。

## 1956(昭和31)年度

熊谷義信(4年)、以下3年の深瀬一男、宮原巍、村石幸彦でリーダー会が発足した。この年は熊谷の発案で年初より冬山・春山共、穂高白出谷にベースを設け、それを起点としてジャングルム飛騨尾根、涸沢岳西山稜、奥穂高の飛騨側の登攀を目標として進められた。

この年は第三次マナスル登山隊が植有恒隊長のもと、5月9日に今西寿雄、ガルツェン・ノルプがマナスルの頂上に立った。これが日本人初の八千<sup>㍉</sup>峰の登頂であり、世界で8番目の八千<sup>㍉</sup>峰の初登頂であった。引き続き5月11日には、第二次登頂隊の加藤喜一郎と日下田実が、第二登を果たした。この隊には、日大からも千谷、松田の二名

が参加し初登頂の裏方として、サポート面で活躍した。

## 1956(昭和31)年 第一次南極観測隊と日大山岳部

1956年は南極観測隊が南極にかけた記念すべき年であった。2年前の1954年の富士遭難の際には、金坂OBが捜索現場の責任者になり、山麓、富士吉田の浅間坊に設置された合同捜索本部には、本部長として初見OBが常駐していた。ここで後に南極で活躍する東大OBの鳥居鉄也、山上良夫氏等と知り合い、また初見が北大OB(日大卒業後北大に進学した)であったことも幸いし、初見OBの推薦で、建築学科出身の平山善吉が設営担当として第一次南極観測隊に参加、以後も引き続き参加することになった。

こうして日大グループは平山OBを核として南極とのつながりを深くし、その後、第10次の観測までに延べ13名(うち越冬者5名)を送ることになった(詳細については184頁所収の『桜門山岳会と南極』を参照)。

## 1957(昭和32)年～1958(昭和33)年度

1957(昭和32)年には富士遭難のとき、一年部員であった深瀬一男がチーフリーダーとなり、熊谷義信、村石幸彦と3人でリーダー会が発足したが、マナスル初登頂後盛んになった登山ブームの影響もあって、37名の新入部員を迎え、山岳部もようやく軌道に乗りかけてきた。

この年の劔岳夏山生活は、天候に恵まれず入山後の9日間の合宿期間中、行動できたのは、わずか4日間のみであり、それも完全に晴れたのは7月25日のみであった。7月26・27日と停滞が続き、7月28日、平蔵谷20源次郎尾根を末端から登った村石パーティー5名の中の高橋圭介が、雨が激しくなったので、下山中滑落事故で死亡する事故を起こした。

遭難した高橋圭介は、2年部員として自覚をもち、下級生からも慕われた好青年であった。リーダーの深瀬は、3年前の富士山の雪崩遭難の生き残りであったが、再び後輩を遭難事故で失い、その苦悩と心の傷は察して余りあるものがあった。

この年の冬山合宿は劔岳西面小窓尾根から劔岳本峰を極地法により登頂し、春山合宿は、劔ヶ御前をBCとして劔岳東面で行なった。

1958年度は、チーフリーダー菊池富雄以下、和田哲幸、中嶋啓、飯島正敏、山崎隆史の5名で運営された。44名の新人を迎え4月末に入笠山で新人歓迎天幕山行ない、その後初夏の横尾生活、夏山劔岳生活と後半の縦走、秋山天幕懇親会は、奥日光の西湖で行なってきた。当初リーダー会では、春山に重点を置き、冬山合宿は頸城山塊で行なう予定であったが、「OB小集会」(「山岳部会則改定」を参照にて、「北アルプスでなければ大学山岳部にあらず」というような意見が出たため、秋山合宿の前に、急遽、穂高涸沢に変更になった。

冬山合宿は横尾岩小屋附近をBCとしてラッシュ・タクティクスで前半に前穂北尾根、後半に北穂北壁、東稜、南稜等を登攀する計画で、L菊地以下13名が参加して行なわれた。

北尾根アタック隊の山崎、池田は、12月25日午前1時にBCを出発、続いてサポート隊の和田、小島(藤)が、奥穂経由前穂で迎えるため出発する。アタック隊とサポートは前穂頂上で予定通りピバーク、翌12月26日に両隊一緒に奥穂経由で下山にかかり白出のコルを下り出した直後(午後3時30分頃)、先頭の山崎の足下から雪崩が発生した。しかし山崎は雪崩から脱出し、山崎はそのままBCに向けて下り、上に残った3人は小屋に引き返した。途中山

崎は、尾根末端のスキーデポ地から150㍍程下ったところで菅原に出会い、菊池、中村のアクシデントを知る。

一方、涸沢小屋で、天候の回復をまって待機していた菊池富雄(4年)、中村達男(2年)、菅原省司(2年)の3名は、視界が100㍍位になったので、様子を見るため、13時30分頃、行動を開始した。その直後、左手より物凄い速力で、異常な風をともなって、大雪崩が、落下してきて巻き込まれた。幸い菅原は脱出できたが、菊池、中村の二人は、行方不明になった。捜索はその後の降雪と埋没範囲が2万平方㍍に及び、大自然の力の前に成すすべもなく春先に捜索を再開することし涸沢を後にした。

その後、捜索は翌年3月26日に再開し、第5次捜索にて8月25日菊池発見、8月28日中村を発見して捜索は終了した。

なお、この時の唯一の生存者であった菅原は、OBになった1965年冬に雪崩の研究のため穂高涸沢小屋と白出のコルの穂高小屋(冬季小屋)に単身で35日間越冬した。時にはマイナス36度、猛烈な風の中、観測には必ずザイルを着けて、1日2回の定点観測を行なった。

結果はアラレ的雪粒が雪崩を起こしやすいことが判明し、下山後、北大低温科学研究所において、その報告会を行なった。

高橋圭介の剣岳遭難から1年5ヵ月後に再び遭難事故を起こしたことで、部に与えた影響は大きかった。亡くなったチーフリーダーの菊池は、部に活力を与えるため、部員が自由に意見や研究、翻訳等を発表するための部内誌『ゲーとる』を発刊、自らも来るべきヒマラヤ時代を予見し翻訳等を掲載していた、中村も根っからの山岳部員であり、真正面をみて下級生と接していた。

この年の冬山は穂高、槍周辺で慶応大学山岳部が中岳で、早稲田大学が明神岳で、そして我が部が涸沢で遭難を起こし、これらがマスコミで報じられることによって大学山岳部は危険だということ印象を与えることになった。

## 1958(昭和33)年～1958(昭和34)年 日本山岳会ヒマルチュリと日大

ヒマルチュリは当初、日大山岳部独自のヒマラヤ登山計画として検討されてきた。

日大の仲間だけで遠征するなら何処にしようかと話し合った結果、八千㍍峰には少し欠けるが、やり甲斐のある山としてヒマルチュリが選ばれた。

大鷲は、アルパインジャーナルで1955年にケニア山岳会のジョン・ハワード隊長による南西稜から試登した記録を翻訳し、その中にハワードが"もし私が再び登頂を試みるとすれば東側であろう"と述べていることに注目し、登頂ルートは北東からと考えていた。たまたま第二次マナスル隊に参加した松田OBが、帰途ヒマルチュリを偵察して同じ考えで帰国したこともあって、ルートは東尾根からのアプローチに絞られた。しかし、当時の外貨事情から見て、1大学の登山計画では、実際は困難であり、日本山岳会の持っているスポーツ外貨枠を使うしかないという結論になり日本山岳会の持っている遠征資金も含め日本山岳会に対し、無条件に移譲することを提案した。その後、この提案は、日本山岳会の理事会で受理されることになり、日本山岳会の計画として実施されることになった。登山隊長には、村木潤次郎氏が指名され、1958年には、偵察隊として金坂、石坂の2名が派遣された。

その結果、東尾根のBCからのアプローチは頂上まで約25\*㍍。北アルプスでいえば、中房温泉から 燕～槍経由

奥穂までの距離があるのが難点だが、主峰直下に達することができれば、相当の困難が予想されるものの、登頂の可能性はあるとの見通しを得て帰国した。

そして、翌年の1959年春には、村木潤次郎隊長以下8名のヒマルチュリ登山隊が組織されたが、日大からは石坂OB、松田OB、木村勝久(毎日新聞報道)の3名が参加することになった。その大部分が20代という若い隊員で構成されていた。

この隊は、5月21日、石坂、松田の2名が最初にして最後のアタックに向かったが、頂上直下の氷壁は、傾斜もあり、その上、固いブルーアイスのため、30㍎を進むのに2時間を要し、頂上まで450㍎を残し、7400㍎を最高到達点として敗退を余儀なくされた。

松田は最後のアタックから撤退した時に大鷲を思い出し、その気持ちを"近い将来、再びこの壁を登る機会に恵まれたならば、彼と共に登ってみたい。このヒマルチュリ計画を立案した彼こそ、この壁を登るべき人間である"と述べている。

ヒマルチュリは、翌1960(昭和35)年、慶応義塾大学の山田二郎隊長以下十名の登山隊によって西面ムシコーラから初登頂された。しかし、東尾根のルートからの登頂は未踏のまま残されている。

その後、日大では1981年に橋本健を隊長にヒマルチュリ南稜に登山隊を派遣、7600㍎に達し、頂上への可能性を見つけて帰国した。1986年岡田貞夫を隊長に再度、南稜に挑み、南稜からの初登頂を果たしている。ヒマルチュリの通算第6登であった。

## 1946(昭和21)年～1958(昭和33)年(二)のまとめ

(二)を「戦後の再建・充実と挫折の時代」としたのは、終戦直後の新生山岳部の誕生、そして前半の1949年春山遠見尾根生活の敗退から1950年劔岳春山生活、その冬の北鎌尾根、1951年の劔岳春山生活とその冬の奥又白生活まで順調に推移した、前半の第2期黄金時代と、これを頂点として後半の1952年から58年までの挫折の時代とも言える、不幸な時代を述べてきた。この時代には、白出谷、小窓尾根等での積雪期のすぐれた記録があったにもかかわらず、1952年初夏の不幸な槍沢小屋焼失事件に遭遇してからはじまった、遭難事故で、多くの若い命を失った仲間のことを、確りと伝えなければならないと思う。即ち1952(昭和27)年冬のコブ尾根の事故、1954(昭和29)年11月の富士山雪崩遭難事故、1957(昭和32)年夏の劔岳源次郎尾根の遭難、1958(昭和33)年冬の穂高涸沢での雪崩遭難事故と、7年間に11名もの部員を失ったことは、まさに出口のないトンネルのような挫折の時代であった。

これらの多くの試練を経て、当部はその後、順調に推移し、1996年3月26日の中央アルプス空木岳における斎藤伸司(3年)の遭難まで、36年5ヵ月の間、現役学生の死亡事故はなかった。

勿論死亡事故にはつながらなかったものの、事故がなかったわけではないが、何が原因でこれ程無事故が続けられたかについては定かではないが、コーチ会の果たした役割が大きかったのかもしれない。

しかし、その後の部員数減少による衰退の道を進んだことを考えると、複雑な気持ちにならざるを得ない。